

第1回感染症研究の推進に関する作業部会のご意見

令和8年2月

文部科学省研究振興局
研究振興戦略官付

○ 文部科学省で行う感染症研究支援の必要性

（第4期の振り返り）

- 第1期に海外研究拠点事業に参加し研究者としてのキャリアを始めたが、その後、多くの研究成果を出し多くの研究者を巻き込んで連携しながら発展してきている。
- 改めて本事業の成果について聞き、非常に多くの成果が出ていると強く思った。
- 基礎研究としては素晴らしい成果がどんどん出ていて、拠点ごとにかなり先端的研究がされている。
- すごく活発に活動し、成果も大変注目すべきもの。今後の日本の感染症対策に資する情報が得られている。
- 最初は海外拠点を作るというご苦労があり、そこがしっかり根付いて、その後、海外拠点活用研究領域という取り組みが始まり、それがこの事業をより一層発展させた。
- 当初から国立感染症研究所としっかり連携していくことが明記され、また、若手の活用、人材育成にも取り組んできたことが非常にこの事業を発展させた。

（拠点事業の有用性・重要性）

- このプログラムは日本にとっての非常に重要で大事な基盤であり、財産。海外にはオックスフォードやパスツールのネットワークがあるが、そこを超えてしっかりと育てていく必要がある。インテリジェンスと応用や臨床も含めた研究開発をしっかりとやっていくという方向性は非常に重要。
- これまで感染症分野に関わってきたが、海外拠点のこれほどすばらしい活動をあまり認識していなかった。今日も事業の中が見えにくいというご意見があったが、もっと広く情報発信をすべき。
- 新興・再興感染症領域は事業性が低く、企業が参入しづらい部分がある。そのため、企業がこの分野に参入していくためには、アカデミア主導での基盤・基礎研究が重要となる。一方で、研究者からは研究資金が不十分、継続的にももらえないことで研究をうまく進められないという声を聞いている。アカデミアに対する継続的な支援の規模・方法について議論が必要である。
- コンゴ拠点は未知の病原体についての研究を奥地の病原体のある村に実際に入ってやっており非常に重要な活動。

○ 海外研究拠点の役割と対象地域

- 多くの拠点で、大使館や領事館、JICAの方々といった現地の日本の関係者とのネットワークづくりや現地政府、規制当局ともしっかりと連携を取って活動を進め、現地で非常に信用され、多くのことが進められている。これは先生方が構築されたすごく大事な信用だと思うので、こういう活動を何らかの形で評価できないかは議論したい。事業全体としてもそうした拠点の持つネットワークを活用することが大事。
- ザンビア拠点が中心に構築している広域連携型サブサハラアフリカ拠点コンソーシアムのような取り組みを始めから、拠点間のシナジーが働いて研究活動が活発化しており、これを進めていくことが必要。ゴールを見据えると、今後は拠点間の連携も進めながら、AMEDの他のプログラムとも連携していくことが非常に重要。
- 海外の人材の育成し、その人材とのネットワークを構築することは重要。
- 海外研究拠点を持つ大学の医学部生だけでなく日本の拠点を持たない医学部の学生の実習を受け入れている拠点があり、拠点活用としては良い取り組み。

○ 感染症研究人材の育成

（人材育成）

- 新型コロナのパンデミックの際に、全国から数十名の感染症研究者とか疫学者が集結し、厚生労働省の新型コロナウイルス感染症対策本部にクラスター対策班が設置され、そこには、本事業の海外研究拠点で博士号を取ったり、キャリアを積んできたメンバーが数多くいた。当時の日本においては、海外留学や国際機関で仕事をした人材を除けば、グローバルな視点と現地のフィールドの視点の両方を持った人材は、海外拠点に限られていた。クラスター対策班に集まった海外拠点のメンバーの中にはJIHSの中で部長や室長として活躍している人もいる。我が国の有事対応に際してこの拠点がいかに役立ったのかということを海外研究拠点の人材育成の成果として、アピールしておくべき。
- 拠点ごとに基礎、臨床、疫学の三つの分野で人材の偏りは当然ありうるが、3つの分野の人材が必ず一緒になって活動していくことでさらに研究が発展すると思うので、次期事業ではそうした点を記載すると臨床の人材も参入しやすくなるのではないか。
- 人材育成は非常に大事。このプロジェクトが人材育成で役割を果たしてきたということは非常に大事な成果。一方で、人材育成が本当に十分なのかしっかり評価していかなければいけない。もっと増やすためにどういう工夫をすればいいのかということも、考えておかなければいけない。
- 特に危機管理体制においての人材を育成するという視点に立つと、研究者の裾野を広げるという意味においての人材育成であり人材の獲得になるが、海外拠点をさらにもっといい形で活用できないかという方向性も考えていく必要があるのではないか。
- 今後の論点として、拠点を活用した素晴らしい成果をアピールしてAIなどの他分野の人材や若手人材に興味を持ってもらうという視点も必要。

○ 感染症研究人材の育成

（若手研究者）

- 博士課程の学生や若手研究者など若い人たちが内向きになっているかというところを感じない。
- 環境が大事で、研究室や研究所が海外を向いていると海外を近く感じ、さらに拠点があるとそこへ博士の頃から行って研究ができ、その後も海外にという志向になる。それをもっと日本全体に広げていくと多くの若手研究者が海外に行くと思うのだが、研究費の問題がある。拠点活用研究の公募の門が狭くなかなか採用されない。
- 海外拠点活用の公募の門を広げると、新たに入った先生や研究室の学生も海外へ、といういいループ、サイクルが回っていくのではないかと。

○ 感染症研究人材の育成

（多分野の研究者）

- AI・データサイエンスの活用という面ではあまり顕在化していない。AI・データサイエンスの研究者自体も感染症研究領域にあまり入ってきていない。次期事業においてリクルートできるような仕掛けができるとうい。
- ウイルス研究ではウイルス単位で縦割りの研究になりやすいので、単独のウイルスを超えたような知見や研究方法の共有がもっと起こると研究が進む。インフルエンザウイルスの研究でも研究の進んでいたHIVの研究手法を導入することで良い論文となったので、ほかのウイルス領域で進んでいるところをどんどん取り入れていけるような仕掛けがあるとよい。
- 感染症の研究者が持っている臨床情報も含む情報、検体、関連したゲノム情報、ウイルスの動態等をデータサイエンスの専門家に渡すとすごいものが出てくる。その意味でデータサイエンティストに声をかけ、力を借りるということを意識的にやっていく必要がある。

（基礎研究と臨床医）

- 臨床医としてJ-GRIDに加わる際、入り口が見えにくく、入っていいのかという不安があった。参入後は、研究費や経験の面で臨床家だけでできることに限りがあったが、臨床家としての能力や意見を活用して、拠点の研究者と分担することで研究を進めていくことができた。
- 多分野融合は非常に大事な方向性。その上で、感染症危機管理の視点からは基礎と臨床の連携も非常に大事。臨床家の中から基礎医学を目指すような人をいかに育てていくのか意識した戦略的なプロジェクトというのを考えていってもいいのではないか。

○ 海外拠点の継続性

- この事業は拠点構築に関わって信頼関係を構築された先生の人的努力に依存している。そうした先生の退職後の人的交流関係を誰が引き継ぐかということが難しい課題である。
- 拠点の研究者の構築した人的交流関係でのみ成り立っている拠点は多く、自身も次にやる方に入ってもらうなど引継ぎは意識しているが、研究者や教室レベルの動きであり、何らかの問題が起こったときに、それまで構築した人的ネットワークや信用もなくなってしまうというリスクがある。
- 教授が長年、現地のカウンターパートと人間関係をつくっているが、教授が退官した後はどうなるのかという拠点がいくつか思い当たる。この事業を今後も続けていくのであれば、属人的ではない、何らかのやり方を考えていくべきではないか。

○ モニタリング体制の強化

（ネットワークコア拠点）

- 感染症インテリジェンスについて各拠点から情報を自発的に上げていく形はできてきた。次の段階では情報要求の主体は誰なのか、何をもち見るのかというところを、決めていくことが大事。
- ネットワークコア拠点で、病原体のデータベース並びにバイオバンクの国内事例の整理は非常に重要。